

# 帰国子女の外国語の心理的処理過程と 習得期の関係についての予備的考察

——日本語と外国語の語彙二重コーディングの観点から——

中 沢 保 生

## 1. 問 題

帰国子女の外国語能力の実態を分析した研究はこれまでもいくつかあるが、それらの多くは語彙能力、文法構造についての知識、聴解能力などを言語テストの成績によって明らかにしようとするものであった。それによって外国語学習者としての一般の日本人には到達できない程度の外国語力を習得していることが示されている。しかしこのような測定からわかることは、帰国子女の外国語能力がある基準から相対的にどの位置にあるかということで、外国語能力そのものの特徴が明らかになったとは言えない。ちょうど体温計で測定できるものは平熱から何度体温が変動しているかであって、なぜそのときの体温が平熱からそれだけ異なっているのか、そもそも体温とはどのような仕組みから発生するものなのかといったことは、体温計で体温を測定するだけでは明かにならないのと同じである。

最近それに対して帰国子女の外国語能力そのものをその言語学的特徴から記述する試みや言語使用・言語理解のストラテジーを明らかにする試みなどがなされるようになった（吉田：1989、吉田・荒井：1990、吉田・瀬谷：1990など）。これらは言語学的ないしは言語心理学的な理論的枠組みを準備して、言語習得の到達水準の測定だけでは捉えられない外国語能力の特徴を記述するものであった。

筆者もここ数年、帰国子女の外国語能力の特徴を心理学的な観点から明らかにする試みを続けているが、その前提となる外国語能力についての考え方は、「外国語能力とは、直面する課題を解決するのに適したようにその外国語を何等かの形に処理して、それを駆使して課題を遂行する一連の過程に関与する認知的能力である」というものである。従って外国語能力を測定するためには、そのような認知能力を基に遂行されたと仮定される課題の実行結果（具体的には実験課題の遂行の成績）を観察し、そこから仮説的に捉えた認知能力を推測し、それを外国語能力の一側面と捉えることになる。特にその様な外国語能力によって支えられていると仮定する認知能力を必要とする実験課題として、語彙の記憶再生実験を取り上げてきた。

この外国語に関わる語彙の記憶再生実験課題は、これまで記憶の心理学的研究の分野の中でも比較的早くから関心がもたれてきた2言語使用者の記憶（いわゆるバイリンガル・メモリ）に関する心理学的研究と共通するものである。その中の一つに、異なる2つの言語が心

理的にどのように表象化されているかを検討するために語彙の記憶再生実験を行ったものがある(たとえば、Pavio and Lambert, 1981)。Pavioらは、ある語を見せられてそのまま記憶する場合よりも、そのものの絵を見せられてその名前として記憶する場合の方が、語の再生率がほぼ2倍になるという事実に着目した。再生率が2倍に達する理由として、絵で提示された場合は絵的表象が言語的表象と併せて形成されるためであり、その再生では絵的表象と言語的表象とが互いに助け合って加算的な効果をもたらすが故に、言語的にのみ提示された場合よりも再生率が高くなると仮定された。再生の手がかりとなる心理的表象の助けが多い方が、再生され易いわけである。そこでPavioらは、もし絵の代わりに外国語の訳語を提示してそれを母国語で記憶する場合、その再生率は絵で提示した場合やそのまま母国語で提示した場合と比べてどうなるかと考えた。そしてその再生率は絵で提示された場合と母国語でそのまま提示された場合のちょうど中間になると予想し、英語とフランス語の2言語使用者に対して実験によってそれを確かめた。

その説明として彼らは二重コーディング仮説を提唱している。すなわち、概念が語彙として心理的に処理される対象(心理的表象と呼ばれる)に変換される(コーディングと呼ばれる)時、その刺激がどのようなモードで入力されたかでコーディングのされ方が異なる。絵で見せられてそれを言語化した場合、絵的表象と言語的表象の二重のコーディングが起り、言語のみで表象化された場合に比べ記憶再生の際の手がかりが2倍ある。そのため絵で見せられた概念の方が記憶再生に有利である。バイリンガルの場合、二つの言語の表象がある程度独立に存在しているため、記憶すべき語の言語とは異なるもう一方の言語で提示されるとき、この二つの言語表象体系が活性化されて再生のための手がかりが多くなると考えられた。もっともこれらの二つの言語表象はある程度独立であるとはいえ、絵的表象と言語的表象ほどには独立していないため、絵で提示されるほどには記憶再生が容易ではない。これが語彙の二重コーディング仮説である。

では、成長のある時期で日本語以外の言語を習得した帰国子女がこのような実験課題を実行した場合、異なるふたつの言語を日常的に使用するバイリンガルと同様の結果を示すであろうか。母国語である日本語と外国語とがある程度独立した言語表象体系を形成しているだろうか。このような観点から筆者は帰国子女の外国語能力(特に英語)の心理的特徴を明らかにする試みを続けてきた(中沢:1989、中沢:1990)。本研究では、そのまとめと新たな観点からの分析のための予備的な考察を行う。そのまとめと分析の観点は以下の通りである。

- ①帰国子女は二つの異なる言語を日常的に使用しているバイリンガルと同様な語彙再生のパターンを示すのか、それとも日本国内で外国語として英語を学習した日本人と同様の再生パターンを示すのか。
- ②帰国子女の示す再生パターンは帰国子女の英語能力の特徴を示すものか、それとも単にそのパターンは英語習得の水準が高くなると一様に現れるもので、日本国内で英語を外国語として学習した日本人でも、その学習水準が高くなると共通のパターンを示すのか。

- ③帰国子女は英語の習得や日常的な使用を中断して日本に帰国した後、その様な再生パターンを維持するのか、帰国後の期間が経過するにつれて変化するものか。
- ④帰国子女と言っても外国滞在の時期は多様であり、どの時期に英語を習得したかで再生パターンに変化はみられるのか。

以上の問題についてデータを分析した。

## 2. 方法

### (1) 刺激の種類と提示方法

刺激として用いた概念は以下の60個である。これらの概念は『新教育基本語彙』（阪本、1984）の中から小学校1～3年生段階で学ぶべき語彙水準A1、A2の内最も基本的なA1水準に該当するものを抽出した。しかも平仮名3字以内であること、同音異義語がなるべくないもの、概念的に偏りが無いものを基準とした。結果としては同音異義語のあるものがいくつか含まれ、概念としてクラス名（例：鳥）とメンバー名（例：犬、牛）の混在があるが、提示モードを組み合わせることで混乱を最小限にするようにした。使用した概念は以下の通りである。

めがね	ひつじ	くつ	かぎ	て	いと	はしご	とり	いけ	くま
あめ	やま	うし	つき	さかな	はこ	あに	あし	うさぎ	しま
ねこ	もん	さら	かね	いぬ	はた	みみ	くるま	いし	うみ
ひ	まど	ねずみ	くち	はな	はは	ほし	かわ	ふく	め
いす	うま	へび	き	くも	てら	ほん	かさ	かぜ	ふね
とけい	した	ぶどう	あり	でんわ	ぼうし	はし	いえ	りんご	もり

これらの概念はコンピュータのディスプレイ上で「絵」「英語」「漢字」「平仮名」のいずれのモードで提示されるかによって4つに分けられた。当初無作為に4つに分けられた後、英語で提示される場合、原則として2音節以内の語で日本の中学校2年生までに学習するもの、漢字で提示されるものは原則として日本の小学校4年生までに学習されるもの、という条件によりモードの修正を行った。この作業によって提示順序とモードの異なる3つの刺激系列を用意し、被験者に無作為に提示した。実際の結果ではこの3つの刺激系列の間に差はみられなかったため、合わせて分析を進めた。

提示にはBASICで書かれたプログラムを用いた。コンピュータはNEC：PC-9801、VMおよびVXシリーズを用いた。全ての刺激は5秒間隔でディスプレイ上に現れ、100ミリ秒間提示されて消える。この提示時間と提示間隔は、たとえば英語を見てその概念の絵的イメージを形成する時間的余裕がないように考慮して設定されたものである。ディ

ディスプレイ上には予告のために次の刺激が現れる位置にプラスマーク (+) が表示され、被験者の注意を向けさせる。

全部で60個の概念をディスプレイ上に表示する。この60個の概念を任意に4つに分割し、60個の内15個は絵で、15個は英語で、15個は漢字で、残りの15個は平仮名で提示される。それらをすべて平仮名で書き取らせる。それに引き続いて、書きとった平仮名を順不同でできるだけ多く再生させ、平仮名で書きとらせる。その後、最初に各被験者が平仮名で書きとった用紙を見せ、それぞれどのようなモード(絵、英語、漢字、平仮名)で表示されていたかを再生させる。実験は各被験者が通学している小学校、中学校及び大学の中の1室に必要機材を搬入して行われた。実験に要する時間は一人当たり約20分-30分で、被験者1人につき実験装置1台を用い、同時に2~4人1組で実験を行った。

## (2) 課題

本実験は大きく2つの課題から構成されている。それは提示された概念を日本語の平仮名として記憶したものを再生する課題と、平仮名として言語化したものについてその提示モード(絵か、英語か、漢字か、もともと平仮名だったか)を再認する課題である。

実験の開始に先立って、被験者はアンケート調査と基本的な英語力テストを受ける。アンケート調査は場合によって前もって自宅で記入したり、実験後自宅で記入して郵送により回収した。ついで被験者は実験装置の前で課題についての教示が実験者により口頭で与えられ、サンプルを使って説明を受けた。サンプルは実験で用いる概念と干渉しないもの(絵としては図形(○)、英語、漢字、平仮名としては色名(それぞれred、黒、しろ))が用いられた。

被験者はディスプレイ上の刺激を次のような規則にしたがって与えられた紙面上にすべて日本語の平仮名で書きとるよう要求される。

絵 → 日本語の平仮名でその名前を書く 【ラベリング・ネーミング】

英単語 → 日本語の平仮名でその意味を書く 【翻訳】

漢字 → 日本語の平仮名でその読み方を書く 【音声化】

平仮名 → 日本語の平仮名で書き写す 【書き写し】

(不明の場合は?マークを書き残しておく。)

たとえばサンプルを例にとると、以下のようになる。

提示モード	提示刺激	反応	心理過程
絵	○	→ “まる”	【ネーミング】
英語	r e d	→ “あか”	【翻訳】
漢字	黒	→ “くろ”	【音声化】
平仮名	しろ	→ “しろ”	【書き写し】

ついで被験者は書きとった用紙を回収された後で新たな白紙が与えられ、いま書きとった平仮名を順不同でできるだけ多く思いだして平仮名で書きとるよう指示される。この思い出す課題は被験者には事前に知られないようにしておく。

最後に、被験者は最初に提示刺激を書きとった用紙を再び与えられ、それぞれ平仮名で被験者自身が書きとった各概念がもともと絵、英語、漢字、平仮名のどのモードで提示されていたかを思いだして該当する印をつけるよう要求される。

### (3) 被験者

被験者は海外滞在4年以上の帰国子女（小学校5、6年生：27人、中学生：20人、大学生：8人）と、海外生活経験のない日本の一般生徒・学生（中学生：6人、大学生：9人）である。帰国小中学生は帰国後年数を要因としてふたつの群（帰国後短期・帰国後長期）に分けられるよう集められた。

## 3. 結果と考察

提示刺激を日本語に書きとった語彙の再生率を、いくつかの要因で分類した被験者群の間で比較した。語彙の再生率の算出方法は次の通りである。提示刺激数は絵=15、英単語=15、漢字=15、平仮名=15、であるが、被験者が見落とししたり認識できない場合があることを想定して、「当初被験者が提示された刺激を平仮名ですべて書きとることを要求された時点で、書きとることができたもの」を全体の数として、後から再生することのできたものの割合を再生率とした。したがって全てを書きとることが出来た場合、各モードとも全体数が15、たとえば漢字モードでの提示の概念において、もし読むことのできない漢字がふたつあって、その読み方を平仮名で書けずに？マークにしたり書き落としてしまった場合、それは全体の数から外して全体数を $15 - 2 = 13$ として再生率を算出する。その結果は次のようになる。

### (1) 帰国小中学生と一般中学生との比較

まず帰国小中学生と一般中学生とを比較した結果は図1および表1の通りである。

図1. 提示モード別語彙再生率「帰国小中学生と一般中学生の比較」

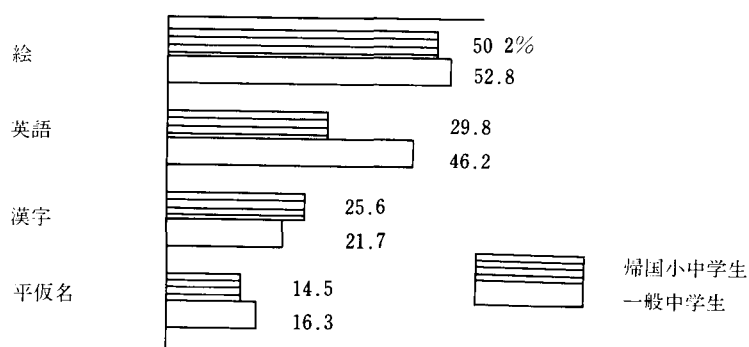


表1. 提示モード別語彙再生率「帰国小中学生と一般中学生の比較」

(%)	提示モード	絵	英語	漢字	平仮名
	帰国小中学生	50.2	29.8	25.6	14.5
	一般中学生	52.8	46.2	21.7	16.3
	有意水準	—	( $P < .01$ )	—	—

この結果から明らかなように、帰国小中学生と一般中学生との間には明かな差が見られる。すなわち全体の傾向としては再生率は絵>英語>漢字>平仮名の順であるが、英語モードで提示された概念の再生率は帰国小中学生の群は29.8%に対し、一般中学生は46.2%となっており、一般中学生の英語提示語の再生率がかなり高くなっている。

この帰国小中学生の示すパターンは、Pavioら(Pavio and Lambert, 1981)で示されたバイリンガル(日常的に二つの異なる言語を使用する者)と共通のもので、英語を外国語として学習するのみで日常的にほとんど使用しない一般中学生とは明かに異なるパターンである。したがって、海外滞在中と日本帰国後とは英語使用環境が大きく異なってしまう帰国子女でも、語彙再生課題における英語の言語表象の果たす役割の点ではバイリンガルに匹敵するものを持っていることが考えられ、日本国内で外国語として英語を学習しただけでは得られない心理的特徴を持っていると思われる。

## (2) 英語力と再生パターンの関係の谷析：大学生の比較

帰国小中学生が一般中学生とは明かに異なり、むしろバイリンガルと類似の再生パターンを示したが、その原因が単に英語の習得水準の違いにあるとも考えられる。そこで新たに英語の習得水準をテストによって測定し、その違いが英語の再生パターンにどのような影響を与えるか分析した。用いたテストは英語圏では日常的に用いられる英語語彙のテストとクローズテストである(中沢:1989、参照)。その結果は以下の通りである。

表2. 語彙テスト結果(日常の英単語)

	(10点満点)
帰国小学生	5.42
帰国中学生	7.63
一般中学生	0.83
帰国大学生	7.63
一般大学生	7.22

表3. クローズテスト結果

(20点満点)

帰国小学生	10.72
帰国中学生	16.73
一般中学生	1.67
帰国大学生	19.75
一般大学生	19.56

表3に示されるとおり、確かに一般中学生のクローズテストによる英語力は帰国小中学生に比べてきわめて低く、帰国小中学生と一般中学生との間にみられた再生パターンの違いは英語力の違いに帰されるとも思われる。そこで帰国大学生と一般大学生とを比較すると、少なくともこのテストに関する限り両群には差がなく、しかも一般大学生は当然ながら一般中学生よりもはるかに高い英語力を示す。これは表2の結果にも現れ、外国語としての英語の教科書にはほとんど現れない英語圏の日常語彙の点でも、一般大学生は帰国生に匹敵する結果を示している。

このように一般大学生は日本国内で外国語として英語を学習し、文法や英語の文章構造と言った言語知識を利用するクローズテストだけでなく日常語彙の点でも中学生段階を大きく上回る習得水準に達していることがわかる。そこでこの帰国大学生と一般大学生の間で再生率を比較すると図2および表4のようになる。

図2. 提示モード別語彙再生率  
「帰国大学生と一般大学生の比較」

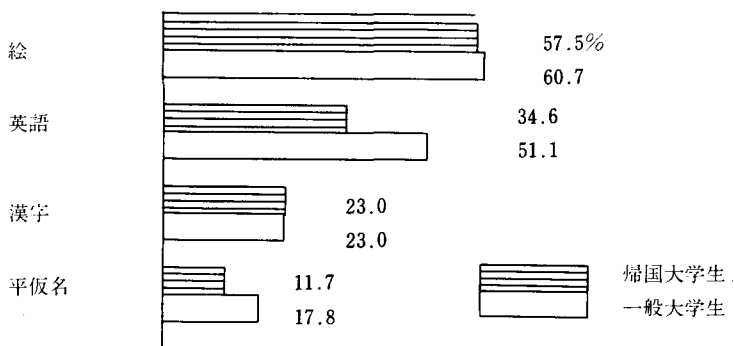


表4. 提示モード別語彙再生率「帰国大学生と一般大学生の比較」

(%)	提示モード	絵	英語	漢字	平仮名
	帰国大学生	57.5	34.6	23.0	11.7
	一般大学生	60.7	51.1	23.0	17.8
	有意水準	—	( $P < .01$ )	—	—

これによると、図1に見られた帰国小中学生と一般中学生の間の再生率のパターンの違いが、帰国大学生と一般大学生との間にも全く同様に見られることがわかる。

したがって日本国内で外国語として英語を学習し、英語力としては帰国小中学生を上回るまでに達したと思われる一般大学生でも、異なる2言語を日常的に使用するバイリンガルとほぼ同じ傾向を示す帰国小中学生、帰国大学生のような英語の心理的処理過程を備えていないことが推測される。したがって、このような再生率のパターンは帰国子女の英語能力の心理的特徴を示すものと考えられ、単なる英語習得水準の高さにのみ帰されるものではないといえる。

### (3) 心理的特徴の保持の実態：帰国後期間による比較

では、このような帰国子女の英語能力の心理的特徴は、帰国子女が日本に帰国してからも保持し続けるものであろうか。それとも帰国してからの期間が経過するにつれて失われてしまうものであろうか。この点を検討するために帰国子女を「帰国後短期群」(帰国後半年以内：21人)と「帰国後長期群」(帰国後2年以上：26人)の2群に分けて、提示モード別の語彙の再生率を比較した。その結果は以下の図3および表5の通りである。

図3. 提示モード別語彙再生率  
「帰国生徒の帰国後期間による比較」

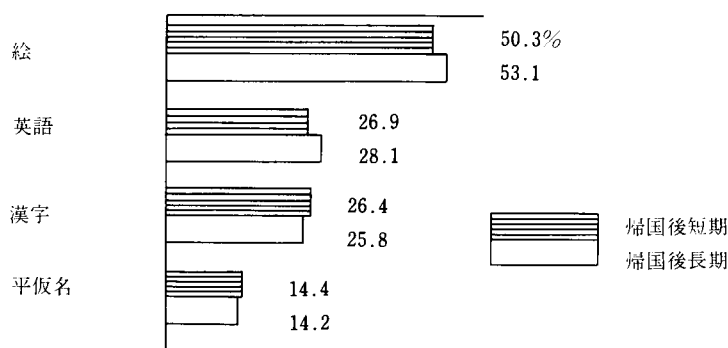




表 5. 提示モード別語彙再生率「帰国生徒の帰国後期間による比較」

(%)	提示モード	絵	英語	漢字	平仮名
	帰国後短期	50.3	26.9	26.4	14.4
	帰国後長期	53.1	28.1	25.8	14.2
	有意水準	—	—	—	—

このように、帰国子女の帰国後の期間の長短によっても提示モード間の再生率の傾向に大きな変化はみられない。この点からみても、帰国子女のいわゆる英語力が表面的には帰国後年数の経過と共に低下していても、その英語力を語彙処理過程の面から検討すると帰国後すぐの時期と帰国後2年以上経過した時期とでは大きく変化していない、すなわち保持されているということが推測される。語彙処理過程にはいくつかの水準があり、ある水準では帰国後確かに変化しているにも関わらず、今回の実験課題はその水準での変化を実験結果の中に反映しない、すなわち帰国後もまだ変化していない水準の語彙処理過程を活性化させるものであったという可能性はある。いずれにしろ、語彙処理過程の中には帰国後の変化を受けない水準が確かに存在していることをうかがわせる。

#### (4) 英語習得期と再生パターンとの関係

帰国子女の示す再生率のパターンが日常的に2言語を使用するバイリンガルのもものと類似しており、帰国後もこの傾向を保持し続けているとすれば、帰国子女のこの英語能力の特徴を左右する要因としてその帰国子女が成長段階のどの時期に英語を習得しどの時期に中断したか、ということが考えられる。今回このデータを収集するに当たって帰国子女の英語習得期をコントロールしなかったため、厳密な分析はできないため、今後この観点からの研究を進めるための予備的な考察を行なうにとどめる。

外国語、一般的には言語の習得と年齢の関係については様々な議論がなされてきたが（たとえば Lenneberg: 1967, McLaughlin: 1977, Steinberg: 1982）、ここでは便宜上就学年齢である6歳と文化同化にとって臨界的な年齢と仮定されている（箕浦：1984参照）9歳に注目し、この年齢段階による言語習得期の区分に当てはまる帰国子女を次のようにグループに分けた。

- ①幼児期英語習得群（6歳までに日本に帰国）：3人
- ②低学年英語習得群（6歳以降9歳までに日本に帰国）：9人
- ③高学年英語習得群（6歳以降海外に渡航し、10歳以降に帰国）15人
- ④長期英語習得群（6歳以前海外に渡航し、10歳以降に帰国）12人

それぞれの群の提示モード別再生率は以下の図4および表6の通りである。

図4. 提示モード別語彙再生率  
「英語習得期による比較」

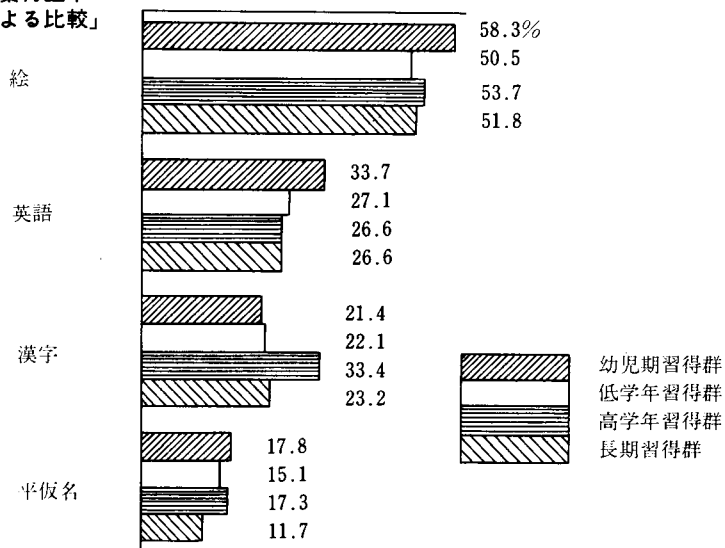


表6. 提示モード別語彙再生率「英語習得による比較」

(%)	提示モード	絵	英語	漢字	平仮名
	幼児期習得群	58.3	33.7	21.4	17.8
	低学年習得群	50.5	27.1	22.1	15.1
	高学年習得群	53.7	26.6	33.4	17.3
	長期習得群	51.8	26.6	23.2	11.7

これを平仮名提示の語の再生率を1として各モードの再生率との比を算出すると表7の通りとなる。

表7. 提示モード別語彙再生率の比「英語習得期による比較」

	提示モード	絵	英語	漢字	平仮名
	幼児期習得群	3.28	1.89	1.20	1.00
	低学年習得群	3.34	1.79	1.46	1.00
	高学年習得群	3.10	1.54	1.93	1.00
	長期習得群	4.43	2.27	1.98	1.00

今回は各群の間で海外滞在年数、帰国後年数などをコントロールしていないので、ここで得られた結果をただちに言語習得期の相違に帰することはできないが、この結果をもとに予備的な考察を行なう。まず明らかなことは、英語習得の開始と中断の時期が遅くなるにつれて英語提示の語彙と漢字提示の語彙の再生率が逆転することである。異なる2言語を日常的に使用するバイリンガルの示す再生率パターンにもっとも近いのは、低学年習得群（6歳以降9歳までに日本に帰国）と長期習得群（6歳以前に海外に渡航し、9歳以降に日本に帰国）である。6歳以前に日本に帰国した幼児期習得群はむしろ日本国内で外国語として英語を学習した一般生徒と類似の再生率パターンを示し、6歳以降に海外に渡航し10歳以降に帰国した高学年習得群では平均的な帰国子女の再生率パターンとは異なる結果を示している。

この項でも指摘した通り言語習得期による帰国子女のこの分類では海外滞在年数や帰国後年数のコントロールをしていないので単純に結論付けることはできないが、ここで得られた結果の説明としては以下のような少なくとも2通りの予想が成り立つ。一つは英語の語彙表象形態が明らかに英語の習得時期によって異なると考えられることで、幼児期に英語の習得を中断した場合には語彙表象の水準ではバイリンガルの様な形態のコーディング体系が形成されないが、6歳を過ぎてからも英語の習得を継続したり6歳以降で英語の習得を開始した場合は、語彙表象水準での変化が起こり得る。一方6歳以降に英語習得を開始し10歳以降まで習得を継続した場合には、英語習得にかなりの時間を割かれるためにむしろ漢字の習得が困難となり、漢字処理の心理的負荷が大きくなって漢字提示の語彙の再生が高まる。以上の結果のように、帰国子女の英語の語彙表象過程は帰国後の年数の経過に左右されずに保持される一方で、どの時期に英語を習得したかが大きな影響を与えることが予想されるといえる。

#### 4. 討 論

まず「帰国子女は二つの異なる言語を日常的に使用しているバイリンガルと同様な語彙再生のパターンを示すのか、それとも日本国内で外国語として英語を学習した日本人と同様の再生パターンを示すのか」という問題に対しては、平均的には帰国子女は日本国内で外国語として英語を学習する一般生徒・学生と異なり、バイリンガルに近い語彙表象を形成していると予想される結果が得られた。しかもこれが単に英語学習者としての日本の一般生徒・学生よりも帰国子女が高い英語能力を有しているが故に得られた結果とは言えないことは、英語の学習水準がかなり高い大学生の段階でも帰国学生と一般学生の間、一般中学生と帰国小中学生との間と同様の再生率パターンの相違が見いだされたことから予想された。

もちろん一般学生の英語力がかかなりの水準に達しているとは言え、帰国学生との間には依然としてかなりの英語力の差があることは確かである。例えばこの年齢段階での英語力の水準を示す指標としてよく引用されるTOEFLの得点分布を今回の大学生被験者で比較すると、帰国学生は643点～660点であるのに対し一般学生は550点～590点、いわゆる英検取得者は帰国学生で1級取得者7名：2級取得者1名に対し一般学生は準1級取得者

5名：2級取得者1名となっており、帰国学生と一般学生との間には依然として英語力に大きな差が見られるのは確かである。この英語力の差が帰国学生と一般学生の間で再生率パターンの相違を生み出したと考えられないこともない。しかし、より重要な結果は、英語力に差の見られる帰国小中学生と一般中学生との間の再生率のパターンの相違が、それなりに英語学習水準の高まった帰国学生と一般学生になっても依然として解消していないという事実である。このことは帰国子女と一般生徒の間には単なる英語習得水準の高低以外に、英語の語彙表象過程という英語の心理的処理過程に相違がみられることを暗示するものである。

またこのような帰国子女の英語能力の心理的特徴は、帰国後の年数が経過するにつれて次第に外国語としての英語の学習者である一般生のそれに近づくことはなく、むしろ保存されるものであって、帰国子女のこの特徴は帰国後の年数ではなく言語獲得期のどの段階で英語を習得したかにより大きく影響されるということが推測された。

最後に、「なぜ英語を外国語として学習した日本の一般生が英語提示の語彙をより多く再生できるか」という問題と、「漢字提示の語彙の再生率を測定することはどのような意味があるのか」という問題について考察する。

一般中学生は英語の学習を開始してから2年も経過しない段階でこの実験に参加しており、英語の刺激を非常に新鮮なものとして受け止めていることが考えられる。また一般大学生の場合も、英語を外国語として学習した大学生の中でも英語に対する意識は非常に高い被験者であったことが推測される。このような学習者の英語に対する特別な態度・意識が英語提示の語彙の記憶を助けたことは容易に想像される。すなわち英語語彙のコーディングとは別の要因（例えば刺激の新奇性）で本研究で得られた結果に至ったと考えられなくもない。

そこで本研究で漢字提示の語彙を刺激に用いたことを再検討の手がかりにしたい。バイリンガルに対する語彙二重コーディング研究では、これまで当然ながら漢字を刺激に用いた例はなく、本研究が最初の試みである。本研究で最もバイリンガルに類似した再生率パターンを示す平均的帰国子女群と英語長期習得群（6歳以前に海外渡航し、10歳以降に日本帰国）では、英語提示の語彙と漢字提示の語彙の再生率はほぼ同じであった。一般生徒でも漢字提示の語彙の再生率が平仮名提示の語彙の再生率よりも高くなっており、漢字の心理的処理過程は単に文字（平仮名・漢字）の音声化と言うだけではなく意味処理あるいは漢字表象の処理過程が関与していることが推測される。したがって英語提示の語彙の再生率が高くなるか漢字提示の語彙の再生率が高くなるかは、より表面的な心理的処理水準で考えられると思われる。すなわち、幼児期に英語を習得した帰国子女および外国語として英語を学習した一般生徒は、提示刺激の語彙が何語（英語か、漢字か、平仮名か）であったかという表面的なタグを記憶再生の手がかりにするが故に、漢字提示の語彙の再生率よりも英語提示の語彙の再生率が高くなる。一方英語の高学年習得群（6歳以降に海外渡航し、10歳以降に日本帰国した帰国子女）はむしろ提示語彙が漢字であったという表面的なタグを記憶再生の手がかりにしているが故に英語提示の語彙よりも漢字提示の語彙の再生率が高くなる。このように、提示刺激の表面的特徴のみでその再生率が左右されるだけではなく、英語が語彙表象の生成

過程に密接な関連を持つことが帰国子女の本来の英語能力の心理的特徴を表すものであるといえる。この点をさらに明らかにするために、今後外国語習得期のみが異なる帰国子女に対して同様の実験を行ってみたい。

## 参考文献

- Lenneberg, E. H. (1967). *Biological Foundations of Language*. John Wiley & Sons, Inc.
- McLaughlin, B. (1977). Second language learning in children. *Psychological Bulletin*, 84, 3.
- 箕浦康子 1984 『子供の異文化体験——人格形成過程の心理人類学的研究』思索社
- 中沢保生 1989 『帰国子女の外国語処理過程とその測定方法について——語彙再生実験による日本語と外国語の語彙二重コーディングの実態の分析』 「帰国子女の外国語保持に関する調査研究報告書—昭和63年度—」 海外子女教育振興財団
- 中沢保生 1990 『帰国子女の外国語処理過程とその測定方法について（その2）——日本語・英語の語彙二重コーディングの発達の研究』 「帰国子女の外国語保持に関する調査研究報告書II—平成元年度—」 海外子女教育振興財団
- Pavio, A. and Lambert, W. (1981). Dual coding and bilingual memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 20, 532-539.
- 阪本一郎 1984 『新教育基本語彙』 学芸図書株式会社
- Steinberg, D. D. (1982). *Psycholinguistics: Language, Mind and World*. Longman.
- 吉田研作 1989 『帰国子女の外国語保持に関する一考察』 「帰国子女の外国語保持に関する調査研究報告書—昭和63年度—」 海外子女教育振興財団
- 吉田研作・荒井貴和 1990 『帰国子女の外国語リスニング能力の保持に関する考察』 「帰国子女の外国語保持に関する調査研究報告書II—平成元年度—」 海外子女教育振興財団
- 吉田研作・瀬谷ひろ子 1990 『帰国子女による英語子音の音知覚と語彙ストラテジーの使用』 「帰国子女の外国語保持に関する調査研究報告書II—平成元年度—」 海外子女教育振興財団

**付 記** 本研究のデータ分析に当たり、東京大学大型計算機センター HITAC M-680 H/682 H および統計計算パッケージ SPSSX を使用した。またデータの収集は（財）海外子女教育振興財団が笹川平和財団からの助成金を得て行なった事業の中でなされた。